

はじめに

スピノザの存在論には二つの時間システムがある。「永遠」と「持続」である。これらは別々の存在領域に関わる時間システムではない。「現実存在」という同一の存在領域に関わる時間システムである。ただし、これらは同等の位置に置かれているのではない。「現実存在」とはその本性において「永遠」であるというのだ。では、いったいどんな意味において「現実存在」が「永遠」であるといわれるのだろうか。また、「現実存在」を「永遠」とみなすような特殊な存在論において、「持続」はどんな意味を持つのであろうか。これらの問いかけをもとに、時間論の観点からスピノザの存在論がとらえ返される。もっとも重要な課題は「永遠」という時間システムの中に「持続」という時間システムが発生する論理を『エチカ』のテキストによって再構築することである。「永遠」の中に「持続」が発生する論理とは、神の中に人間精神が発生する論理にほかならないという点が明らかにされる。「直観知」の理解によってきわめて重要な帰結がそこから導き出される。

「現実存在」の意味は《現在》である。それゆえ、「現実存在」することが本質である神にとっては《現在》があるだけである。それが「永遠」という言葉の意味である。神の無限の変容はその都度たんなる《現在》であって、前の状態から次の状態への変化として認識されていないのだ。これに対し、人間が「現実存在」することは人間の本質ではない。それ自身によってではなく、他のもの（神）によって決定されていると考えられるからである。ただし、「現実存在」に決定された以上、人間もその意味を知っている。つまり《現在》という根源的な時間によって「現実存在」を認識している。人間が《現在》を過去と未来の間において表象するのは、それ自身の「現実存在」の真の原因を知らないからなのだ。その代用品として「これまで現実存在し、これからも現実存在するもの」という形で自己の「現実存在」を了解しているにすぎない。これが「持続」という時間システムの機能である。人間の本質である「コナトゥス」が「持続」の中にあるといわれるのはこの意味においてである。しかし、「持続」というある種の虚構の中で《現在》はそのリアリティーを失っていない。むしろ過去・現在・未来という時間構造は《現在》を支えにしなければ維持できないと考えられる。だからこそ、自己および世界を「持続」というアスペクトにおいて認識している人間精神が、「永遠」というアスペクトにおいて自己および世界の存在を認識するという「直観知」の可能性が主張できるのである。

## 1 現実存在

本質が永遠であるのに対して、現実存在するものには始まりと終わりがあると考えられる。したがって「現実存在」を「持続」によって規定することはごく自然である。これに対し、スピノザは現実存在が「永遠」であると主張している。この点を鮮明に認識するために、『エチカ』第二部定理45を参照しよう。ただし、この定理の内容そのものよりもむしろその注解が重要である。

「現実存在する各々の物体ないし個物の観念は、神の永遠かつ無限の本質を必然的に含む」(Eth.II.45.Pr.)。

定理そのものについては、「現実存在」する個物が問題になっているという点だけを確認しておこう。この定理の証明の後、スピノザが注解で述べていることに注目すべきである。

「ここで私は現実存在ということで持続ということを理解しているのではない。すなわち、抽象的にかつある種の量として考えられる限りにおける現実存在のことではない。というのは、私が語っているのは現実存在の本性そのものであり、それは神の本性の永遠なる必然性から無限に多くのものが無限に多くの仕方では帰結する(第一部定理16を見よ)がゆえに個物に帰属するものだからである。つまり私は神の中にある限りにおける個物の現実存在について語っているのである」(Eth.II.45.Sch.)。

スピノザはこの定理で言及される「現実存在」が「持続」ではないという点を真っ先に注意している。ただし、「現実存在」は「持続」するものであるということが否定されているわけではない。「現実存在」は「持続」というアスペクトで認識されることもできるが、ここで言及されている「現実存在」は「現実存在の本性そのもの」つまりは「神の中にある限りにおける個物の現実存在」であり、それゆえに「永遠」というアスペクトで考えられなければならないのだといっているだけである。実際、スピノザは別のテキストでは「持続」というアスペクトからも「現実存在」が認識されているという点を認めている。ただし、その場合も「永遠」というアスペクトで認識された「現実存在」が真であるという点が強調されるのである。したがって「永遠は持続と同様に現実存在のひとつの性質である」(Jaquet 2018, 375)というだけでは不十分である。この点の確認のために『エチカ』第五部定理29の注解を参照しよう。

「事物は我々から二通りの仕方では現実的なものとして考えられる。我々は一定の時間及び

場所に関係して現実存在する限りにおいて事物を考えるか、もしくは神の中に含まれかつ神の本性の必然性から帰結する限りにおいて事物を考えるかである。ところで、この第二の仕方では真あるいは実在的と考えられるものを、我々は永遠のアスペクトの下に考えており、またそれらのものの観念は神の永遠かつ無限の本質を含むのである。我々が第二部定理45で示したように。なおその注解も見よ」(Eth.V.29.Sch.)。

第一に、現実存在は「持続」というアスペクトで考えられる。この点は「一定の時間及び場所に関係して現実存在する限りにおいて」と表現されている。第二に、現実存在は「永遠」というアスペクトでも考えられる。この点はまず「神の中に含まれかつ神の本性の必然性から帰結する限りにおいて」と表現された上で、『エチカ』第二部定理45およびその注解を参照して文字通り「永遠」という言葉で言い換えられているのである。

このように、スピノザの存在論において「現実存在の本性」は「永遠」であり、したがって「永遠」のアスペクトでものを認識することが「真」であり「実在的」な認識であると考えられている。「永遠」のアスペクトで認識することが「理性の本性」(Eth.V.29.Dem.)なのである。これと対照的に「現実存在」を「持続」のアスペクトで認識することは「抽象的」とであると主張されているが、それは人間の感覚経験に起因する認識である。「精神はその身体の現在の現実存在を考える限りにおいて、時間によって決定されうる持続を考え、またその限りにおいてのみ事物を時間との関係で考える能力を持っている」(Eth.V.29.Dem.)。こうしてスピノザの存在論を時間論の観点から整理すると、それが典型的な合理主義の主張であることが確認できる。イツァーク・メラメドはこの構造を次のようにまとめている。「永遠は実体の現実存在に固有の説明である。これに対し持続は様態の現実存在に固有の説明である」(Melamed 2016, 157)。しかし、このような理解に満足することはできない。問題は「現実存在」が「永遠」であるという主張それ自体である。これがいったい何を意味するかを理解しない限り、スピノザの存在論の理解は表面的なものに止まるであろう。

## 2 永遠

スピノザにとって、「現実存在」とは何よりもまず「永遠」である。では、「永遠」とは何だろうか。「永遠」とは「永遠なものの定義のみから帰結すると考えられる限りにおける現実存在そのもの」であり、「持続あるいは時間によって説明されえない」(Eth.I.D.8.)という。すなわち、「かつて現実存在した(過去)」ということから「現実存在している(現在)」ということが帰結するのではないし、「現実存在している(現在)」ということから「これからも現実存在するだろう(未来)」ということが帰結するのでもない。たんにその事物を考えることからそれが「現実存在」し

ているということが帰結するということなのだ。

では、「永遠」の定義に当てはまるのはどんな存在者であろうか。いうまでもなく神である。同様に、神の属性も「永遠」である。「神あるいは神のすべての属性は永遠である」(Eth.I.19.P.)。というのも「神の本性には現実存在することが属する」(Eth.I.19.Dem)と考えられるからだ。ところが、神の変容である個物もまた「永遠」であると考えられている。すでに引用したように、「永遠」とは「神の本性の永遠なる必然性から無限に多くのものが無限に多くの仕方で帰結する(第一部定理16を見よ)がゆえに個物に帰属する」(Eth.II.45.Sch.)ものであると考えられているのである。すなわち、「永遠」は神および神の属性に当てはまるばかりでなく、個物にも当てはまる。要するに、現実存在するすべてのものは「永遠」であるということだ。この論理が意味することを探っていくと、「永遠」とは結局のところ《現在》のことであるという解釈に導かれる。

スピノザの存在論において、個物とは神の「変容」あるいは実体の様態であるとされている。実体とは「それ自身において在るもの」(Eth.D.3.)、様態とは「他のものにおいて在るもの」(Eth.D.5.)と定義される。これらの存在論的な関係はここから明瞭である。様態(変容)は実体(神)なくしては存在できないが、実体(神)は様態(変容)なしに存在しうるのだ。ところが実際には、神が「変容」しないままでいるとは考えられていない。「神の本性の必然性から無限に多くのものが無限に多くの仕方で(すなわち無限知性のもとに落ちてくることのできるすべてのものが)帰結しなければならない」(Eth.I.16.P.)。この定理を受け「神が自己原因であるというのと同じ意味において、神はまたすべてのものの原因である」(Eth.I.25.Sch.)といわれるのである。すなわち神が「現実存在」するということは「無限に多くのもの」に変容しているということなのだ<sup>(1)</sup>。

スピノザの存在論は決定論であるといわれている。個物は神によって現実存在することに決定されていると主張されているからである(Eth.I.28.Pr.)。しかし、この決定論は機械論的な決定論とは異なる。なぜなら神という原因は個物に対して外在的に作用する原因ではないからだ。「神はすべてのものの作用因である」(Eth.I.16.Cor.1.)といわれる。この場合の「作用因(*causa efficiens*)」とは外在的な原因という意味ではなく、むしろそれ自身の中に変化を生み出す内在的な原因なのである。神とは「無限に多くの仕方で」変容していく実体を指すのである。

このように、神が現実存在するということは、神がつねに「変容」しているということを意味している。ある「変容」は別の「変容」を引き起こし、この「変容」もまたさらに別の「変容」を引き起こす。すると、神の中にはつねに新しい「変容」があるだけである。ただし、「変容」とはある状態から別の状態への持続的な変化のことではない。なぜなら状態 A が状態 B を引き起こした時には状態 A はもうすでに現実存在していないからである。したがって、神の中には「変容」

しかないとすれば、神の中には《現在》しかないことになる<sup>(2)</sup>。過去から未来へと移動していく点としての現在のことではない。過去も未来もないという極めて特殊な《現在》のことである。これがスピノザのいう「永遠」という言葉の意味ではないだろうか。実際、『エチカ』第一部定理33注解2のテキストで「永遠においてはいつということも前ということも後ということもない」(Eth.I.33.Sch.2.)と明言されている。「いつ」ということがいえるということは、過去から未来へと伸びる線上で位置が指定しうるという意味である。ところが「永遠」においてはそういうことができないとテキストは主張しているのだ。「いつ」ということがいえないのだから、「前」も「後」もないのは当然であろう。「前」および「後」を決定するには時間線上で任意の点を指定しなければならないからである。

ちなみに、このテキストは神から産出された事物は別の仕方では産出されないということ、すなわち事物の必然性を証明する定理の注解として書かれている。注解の意図はこの主張に対する反論への再反論である。神は完全であるから別の仕方でも意思決定することもできたであろうという反論が想定されている。スピノザは反論する側の言葉を借りて再反論している。すなわち、神は実際に意思決定したのとは別の仕方でも意思決定することはできないのだ、と。その根拠となるのが上で言及したテキストである。「永遠においてはいつということも前ということも後ということもない」。したがって、「神は決して別のことを意思決定することができず、またできなかった。あるいは神はその意思決定以前には存在できなかったし、また存在できない」(Eth.I.33.Sch.2.)というのである。神の意思決定がなされたのは「いつ」なのかを時間の線上で指定できれば、その時点で実際になされた意思決定とは別の意思決定が可能であったかのように考えられる。しかし、「いつ」ということがいえないのだから、別の意思決定の可能性も考えられない。これがテキストの意味である。神は意思決定の時にしか存在しない。つまり《現在》にしか存在しないのだ。このように、《現在》という概念はスピノザの必然性の概念を支持する重要な概念なのである。

一見すると、このような存在論の中で「持続」が発生する余地はないように思われる。「持続」とは一定の幅を持った時間的延長であり、過去から未来への線上を動いていく現在のことからである。しかし、人間精神と呼ばれる個物にとって、自己も世界も「持続」の中に現実存在している。つまり、「持続」は人間精神にとっては現実なのである。では、このような現実をスピノザはいかなる論理で説明するのであろうか。

### 3 持続

「持続」という時間システムが導入されるテキストは『エチカ』第二部定理8系である。定理そのものから順に見ていこう。

「現実存在しない個物あるいは様態の観念は、個物あるいは様態の形相的本質が神の属性の中に含まれている (*continentur*) のと同じように、神の無限の観念の中に表現されて (*comprehendi*) いなければならない」 (*Eth. II. 8. Pr.*)。

この定理において証明されるのは「現実存在しない個物」の「観念」の存在である。「現実存在しない個物」が形相的に神の中に含まれているとすれば、その「観念」も表現的に神の中にあるというのが定理の内容である。もちろん、文字通りの意味で「現実存在」しないというのではない。必然的な「現実存在」を含まないという意味である。「現実存在しない個物」というフレーズがこのような意味に解釈しうるといふ点は、スピノザ自身が書簡において同じフレーズを用いていることから確認できる。個物ないし様態について、スピノザは「たとえ現実存在していたとしても我々はそれらを現実存在しないものとして概念することができる」 (*Ep. XII, 54.*) と述べているのである。

実際、スピノザの存在論によれば、個物は神によって「現実存在」に決定されるのであって、それ自身を「現実存在」に決定することはできない。例えば、人間がそうである。「人間の本質は必然的な現実存在を含まない」 (*Eth. II. Ax. 1.*)。人間を含め、それ自体として考えられた個物の中にはそれが「現実存在」すべき根拠は見出されないのである。「神から産出された事物の本質は現実存在を含まない」 (*Eth. I. 24. Pr.*)。この限りにおいて、その事物を考えることから直ちにそれが「現実存在」していることが帰結するという「永遠」の定義は、個物には当てはまらないということになるだろう。神の本質から帰結する「変容」の連鎖の中に含まれ、神という原因の力によって「現実存在」に決定されている限りにおいて、個物の「現実存在」も「永遠」であると考えられるにすぎないのだ。

さて、この定理の系においては「永遠」という時間システムに加えて「持続」という時間システムにおいて「現実存在」が問題にされている。「持続」に注目しよう。

「個物が神の属性の中に含まれている限りにおいてのみ現実存在するといわれるあいだは、個物の表現的存在すなわち観念は神の無限な観念が現実存在する限りにおいてのみ現実存在する。また、個物がただ神の属性の中に含まれている限りにおいてだけでなく、さらにまた持続するといわれる限りにおいても現実存在するといわれる場合には、その観念もまた個物が持続するといわれる現実存在を含む」 (*Eth. II. 8. Cor.*)。

「神の属性の中に含まれている」というのがテキスト前半で言及される「現実存在」の第一の意味である。各々の個物は神の中に含まれている限りで「現実存在」するという意味だ。この

場合、個物は「永遠」という時間システムにおいて認識されている。それは神の変容として「現実存在」し、神によって認識されているのだ。これに対し、「持続する」というのがテキスト後半で言及される「現実存在」の第二の意味である。では、「持続」はいかにして発生するのであるうか。

個物は神の変容の連鎖の中で「現実存在」に決定されているにすぎない。少なくとも『エチカ』の存在論によればこれが真である。ところが、人間精神という個物はあたかもそれ自身によって「現実存在」しているかのごとくに自己を認識している。もちろん、『エチカ』によればこの認識は誤謬である。『エチカ』というテキストが興味深い点は、まさしくこのような誤謬が生じる論理を語っている点にある。

事物の無限の連鎖は原因と結果という因果性の構造を持つ。しかし、すでに言及したように、それはかなり特殊な因果性である。というのも、原因と結果の関係が神の「変容」という内的な関係だからである<sup>(3)</sup>。この特殊な因果性においては、ある「変容」の結果として生成した事物それ自体が新しい「変容」を生み出す原因となる(Eth.I.36.Dem.)。モーゲンス・レルケが指摘するように、「現実存在するいかなるものもただ結果であるばかりでなく、それとまったく同様に原因でもある」(Lærke 2009: 185)のだ。問題は後者のケースである。

ある事物は別の事物の「現実存在」の原因となりうる。無論、その本質が「現実存在」を含むからではない。他の事物によって現実存在に決定されたからである(Eth.I.28.Pr.)。同じことは事物の「観念」について当てはまる(Eth.II.9.Pr.)。しかし、いったん「現実存在」に決定され、自らが原因として作用するとき、その「観念」も原因としての事物の「観念」でしかない。こうして、人間精神という個物はあたかもそれ自身によって「現実存在」しているかのごとくに自己を認識することになるだろう。スピノザによれば、人間精神の経験的な認識はこうして発生するのだ。経験的認識とは、すでに現実存在する個物の中に生じる様々な変化についての認識という意味である。このような構造は『エチカ』第二部定理9系で記述されている。

「各々の観念の個別の対象の中に生じるすべてのことの認識は、神がただたんにその対象の観念を持つ限りにおいて、神の中に与えられる」(Eth.II.9.Cor.)。

神がその対象の原因の観念ではなく、「ただたんにその対象の観念」を持つ場合には、神でさえ、ただ「与えられて(datur)」いる内容を肯定することしかできないのだ。人間精神とはこのような観念である。では、「その対象」とは何だろうか。いうまでもなく身体である。

「人間精神を構成する観念の対象は身体である。すなわち現実存在する延長の一定の様態であり、それ以外の何物でもない」(Eth.II.13.P.)。

この定理によれば、様々なことが現実的に身体に生じることを認識しながら、その原因を認識できずただその内容を肯定する認識作用として人間精神が機能していることになる。この認識作用は神の「変容」として発生しているという点においてリアルである。しかし、本来は原因から結果へと連鎖していく「変容」の一局面でしかないという欠如を含んでいる。そのために、人間精神はそれ自身の中に「現実存在」することへの欲望を感じることはできてもその原因を知らないのだ。スピノザによれば、誤謬とはこのような認識の欠如そのものなのである。

「誤謬は不十全な諸観念すなわち欠損して混乱した諸観念が含む認識の欠如に存する」  
(Eth. II. 35. Pr.)。

『エチカ』はこのような認識の欠如を充当するために様々な幻想が作り出されていることを証明する。「自由意志」の幻想はその代表的なものだ<sup>(4)</sup>。「持続」という時間システムも同様である。その機能は、これまで「現実存在」してきたものが引き続き「現実存在」しているという論理によって、個物の「現実存在」についての認識の欠如を充当する点にあると考えられる。「持続」とは根拠を失った「現実存在」に対して仮の根拠を与える時間システムなのだ。したがって、それは「現実存在」についての真の認識ではありえない。

まとめておこう。「永遠」と「持続」という二つの時間システムはどちらも「現実存在」に関わっている。二つのシステムの違いは「現実存在」を認識するアスペクトの違いである。「永遠」とはたんなる《現在》として「現実存在」を認識することである。そのような認識が神の認識である。《現在》において「現実存在」を認識することが最もリアルな認識なのだ。これに対し、それ自身の中に「現実存在」の根拠を持たない個物にとって、「現実存在」の根拠はその「持続」にしか見出されえない。この場合、個物も世界もこれまで「現実存在」し、これからも「現実存在」するであろうものとしてしか認識されていない。「持続」というアスペクトにおいては「現実存在」が《現在》においてではなく、むしろ《現在》から過去および未来へ超出することによって認識されているのである。

#### おわりに

以上の考察を「直感知」の問題につなげて理解することで結論に代える。その手がかりとして、定理8系の構文が重要な意味を持ってくる。個物が「神の中に含まれている限り」においてすなわち「永遠」である限りにおいてだけでなく、さらにまた「持続するといわれる限り」においても現実存在する、という構文である。「持続」という時間システムが「永遠」という時間シス



テムを前提しかつそれを含んでいるということをこの構文が示唆しているように思われる。では、「持続」が「永遠」を前提するということはいったい何を意味しているのだろうか。これまでの考察を踏まえれば、次のように考えられるはずである。

「現実存在」とは《現在》に存在することである。この点は「永遠」という時間システムにおいて純粹に達成されている。ところが「持続」という時間システムにおいても「現実存在」とは《現在》に存在することである。これらの異なる時間システムにおいて《現在》の意味は一義的である。したがって両者の区別は《現在》がどのように認識されるかという点にある。

「永遠」の中には前も後もない。そこには《現在》しかないからだ。この点で「永遠」は「持続」と異なる。しかしながら、人間精神が《現在》をまったく認識していなければ、過去および未来という時制は成立しないであろう。《現在》を基準にしなければ過去も未来も意味を持たないからである。ひとことでまとめれば、「持続」は「永遠」を前提している。すなわち、《現在》の意味が「永遠」によって与えられ、それを基準にして「持続」という時間システムが構成されると考えられるのだ。実際、スピノザは人間が精神の永遠性を意識していると述べている。ただし、それを「持続」と混同しているのだ、と。「もし我々が人間の共通の意見に注目するならば、彼らは自己の精神の永遠性を確かに意識しているが、それを持続と混同し、また彼らが死後も存続すると信じる表象つまり記憶に永遠性を帰属させるのを見出すであろう」(Eth. V.34.Sch.)。

以上を踏まえれば、「持続」という抽象的な時間システムにおいても《現在》だけはリアルに経験されていなければならないということになる。まさしく、それがスピノザの主張であると考えられる。スピノザはそのように経験されるものを個物の「コナトゥス」と呼ぶのである。「コナトゥス」とは「個物の現実的本質」(Eth. III.7.Pr.)である。すなわち神の中にある限りで個物に帰属する「能力」(Eth. I.36.Dem.)である。ところがこの「能力」は「無限定な時間を含む」(Eth. III.8.Pr.)。つまり「持続」するものとして行使されているのである。それなら、《現在》から過去や未来へ超出するのではなく、むしろ《現在》に内在することによって、「持続」から「永遠」へと認識のアスペクトを変更することができるという考えが成立するはずである。『エチカ』が提案しているのはこのことではないだろうか。「直観知」とは、人間精神がすでに知っているながらも、つねに取り逃がしている《現在》を、「持続」とは異なった「永遠」という時間システムの中に設定し直すことで達成される認識様式の変更なのである。その時、人間の「コナトゥス」は過去から継続されてきた生を未来に向けて(さらに死後の生に向けて)延長させるものとしてではなく、《現在》の生の強度を肯定するものとして行使されるであろう。

## 凡例

スピノザの著作は以下の略号によって表記する。

『書簡』 Ep. Gephardt(Ed.) 1972, *Spinoza Opera IV*

『エチカ』 Eth. Gephardt(Ed.) 1972, *Spinoza Opera II*

なお、『書簡』の参照テキストは書簡番号および上記全集の頁数で表記する。『エチカ』の参照テキストはローマ数字で各部を示し、定義等は以下の略号とアラビア数字で表記する。

定義:D. 公理:Ax. 定理:Pr. 証明:Dem. 系:Cor. 注解:Sch.

## 注

(1) 松田克進によれば「属性は因果的に連結された様態の集合に他ならない」(松田 2009, 142)。また、モーゲンス・レルケによれば「変容した実体すなわち実体の属性の諸様態以外に何も存在しない」(Lærke 2018, 28)。

(2) 上野修によれば「あるのは変化の今だけだ。スピノザはこういう変化の存在を実体の『様態』と考えていた」(上野 2012, 52-53)。

(3) 柴田 2016, 2020 参照。

(4) 柴田 2012 参照。

## 文献

Jaquet, Chantal 2018, “Eternity,” Michael Della Rocca Ed. *The Oxford Handbook of Spinoza*, Oxford.

Laerke, Mogens 2009, “Immanence et Extériorité Absolue: Sur la Théorie de la Causalité et l’Ontologie de la Puissance de Spinoza,” *Revue Philosophique*, No.2

Laerke, Mogens 2018, “Aspects of Spinoza’s Theory of Essence,” Mark Sinclair Ed. *The Actual and the Possible: Modality and Metaphysics in Modern Philosophy*, Oxford.

松田克進 2009 『スピノザの形而上学』 昭和堂

Melamed, Yitzhak 2016, “Eternity in Early Modern Philosophy,” Yitzhak Melamed Ed. *Eternity A History*, Oxford.

柴田健志 2012 「自由意志の幻想 ニューロサイエンスからみたスピノザ」 西日本哲学会編 『哲学の挑戦』 春風社

柴田健志 2016 「神の変容 スピノザの哲学における目的論・機械論・必然性」 関西哲学会編 『アルケー』 24号

柴田健志 2020 「スピノザの形而上学的決定論 直観知の存在論的背景に関する考察」 日本哲学会編 『哲学』 No.71

上野修 2012 「真理と直観 永遠の相のもとに」 西日本哲学会編 『哲学の挑戦』 春風社